



ゆき 原 祥之
と はら よしき
の 能 登 原 祥 之
(大学文学部准教授)

用例を重視した 研究と教師教育

私の専門は英語教育学で、英語教育に関わる諸現象の原理原則を追究しています。特に、英語表現に興味があり、その表現の魅力の何をどのように教えると効果的かを探究しています。

授業に潜む諸英語

英語の授業にはいろいろな英語が潜んでいます。ALTの先生が使っている英語、録音されたモデルの英語、日本人の英語の先生が使っている英語、学習者が使っている英語、英語教科書に見られる英語、語法指導の際に提示される用例の英語、などです。これら教室内の諸英語の何に気づきどのように学んでいくかは生徒によつて個人差が激しく、英語教育も見方によつて非常に複雑でダイナミックな現象だと感じています。

コーパス化

近年、このような英語教育に潜む諸英語をコーパス化(言語情報を電子化)できるとなりました。また、専門ソフトを使い諸英語のいろいろな特徴を解析できるようになっています。英語母語者の汎用コーパス(数億から数十億語レベル)に比べると、授業に潜む諸英語の特異コーパス(数千から数万語レベル)は小規模となります。しかしながら、英語教育の視点で目的を持って収集し分析す

ると、語彙の頻度情報を基に学習環境の現状や学習者英語の発達傾向をザックリと把握でき、英語表現の形で具体的な教育的示唆が得られます。

例えば、中学校の英語教科書を少し探ってみると、中学2年生で語彙数と語彙の種類が急激に増え、その中学2年生で3.6の4文型が出る前までは、SV、SVC、SVOの3種類の構文のみでリズムに本文が書かれていることが分かっています。

このような教科書英語の特徴は経験を通して何となく肌で感じるものですが、コーパスを通してあらためて確認すると、教科書編纂者の意図や配慮をジワッと感じ取れます。時に「棚ぼた(a windfall)」に遭遇し、教科書編纂者さえ気づいていない事実に出会えるかもしれません。

エビデンス重視

近年、エビデンスを基にした(evidence-based)教育が志向されてきていますが、常に動いている複雑な英語教育の現象をどのような指標でどのような事実として抽出すべきかについて様々な研究方法が提案されています。

英語教育では、主にテストを通して得られた数値データ(numerical data)で教育効果を語ることは多いですが、観察を通して厚く記述する言説(narrative

discourse)や教室内の諸英語を蒐集した言語データ(linguistic data)を加え、現象の多面性を真摯に探究する研究も増えています。

さらに、英語教育が複雑な現象ゆえに、関連諸科学(言語学、心理学、社会学、など)を参考に様々な角度から研究課題に取り組む学際的なアプローチも一層必要とされています。私としては、授業に潜む諸英語を言語データの形で地道に拾い、経験則を批判的に確認しながら、エビデンスに基づく教育研究に貢献できればと思っています。

理論と実践

私の授業は英語教師をめざす学生を対象とした授業が多いのが特徴です。特に何を目的に英語教育を行い、英語表現の何をどの順で指導すべきかについて考えています。具体的には、英語シラバス論(syllabus design & development)、英語教材論(materials design & development)、教育文法論(pedagogical grammar)、辞書学(lexicography)に触れています。

高学年の教科科目では、言語要素や4技能の指導を中心とした指導法の理論的背景や実践的な工夫を紹介しその効果を考えます。大学の講義では、英語教育学や第二言語習得論の「理論を実践に生かす(applying theories into practice)」

話が自然と増えますが、授業例を見ながら、実践から見えてくる理論を発掘する(unearthing theories in practice)、話もしています。また、今まで受けてきた英語授業を客観的な視点で振り返り、お世話になった英語の先生の細やかな教育的配慮にあらためて気づき感謝するとともに、一方で批判的に考える場も提供できればと思っています。教育実習後の指導では、教師としての自分に直接跳ね返ってくる議論内容が多く、学生の実習報告を通して毎回自分が身の引き締まる思いをしています。

教材研究

指導者の立場で実習校の挨拶に行くこと決まって「まず教材研究をしつかり」とよく言われます。授業作りの基本が「教科書を教える」という教えます。教材研究の中でも教科書の本文の分析が基本で、教材を多面的に分析する観察眼が必要となります。例えば「You are always watching television.」と「た短い英文でも言葉の形で見ると現在進行形(present progressive)です。」ところが、言葉の働きで見ると描写(Descriptions)と言葉の含みを解釈すると不満(Complaint)とも取れます。このように、言葉の捉え方一つで、指導目標の中身が変

わり、何を練習すべきかも変わり、ワークシートも変わることとなります。学生の形式重視(form-focused)の言語観を良い意味で壊しつつ、多面的に柔軟な言語観に変えていく工夫を引き続き重ねたいと思っています。

用例重視

私自身が教育実習に参加した際、「語法や文法指導の用例は必ず英英辞典から」という経験則を教わりました。「本物の英語を提示する」という非常にシンプルな教えで、それ以降その教えを個人的には大切にしています。当時、お世話になった実習校では、その方針を先生同士で共有し徹底し指導しておられました。そのため、中高のどの授業を参観しても、英英辞典(e.g. COBUILD, OALD, LDOCE)や語法書(e.g. PEG&PEU)の用例に触れられ、その用例をいかに提示し定着させるかに先生方の工夫が見られました。精選された英文はピリッとパツと見た瞬間に言葉の使い方が分かるものが多く、「味のある用例達」でした。大学の授業では、抽象的な理論や難解な研究に触れていますが、具体的な英語の用例と絡めて考えたり、様々な英語の用例を通して見えてくる経験則を議論したりする時間を少しでも創っていければと思っています。



おく だ い あり
奥田 以在
(大学経済学部准教授)

私とゼミ

私のゼミでは、学生がグループでフィールドワークに出て、京都を中心に活躍されている職人の方々や老舗の方々にお話を伺い、勉強するスタイルを取っています。これは、私を指導して下さった先生のゼミのスタイルに倣っています。

学生たちはテーマを決めた後に自分たちで調査先を探し、お話を聞きに伺います。現在の研究テーマとしては、老舗の和菓子職人や女性の和菓子職人、日本酒の杜氏、ガラス工芸職人、豆腐職人などがあり、学生が思い思いのテーマで調査を進めています。指導に至らない部分があり、調査先では失礼なことが多々あると思うのですが、京都は学生の街と言われるだけあって寛容に受け入れて下さり、大変ありがたく思っております。また同志社の先輩方にお会いすることも多く、同志社の歴史と繋がり強さに随分助けられております。

さて、学生と話をしていると、やはり職人をカッコイイと言います。学生たちは安価な誰もが持っている大量生産品と、職人が作り出すものの違いに大きな価値を見出し、憧れています。また、そ

の専門性、自分にしかできないことがあるということにも憧れているようです。そのような方々に直接お会いすることで、彼らはプロのまなざし、迫力を肌で感じて帰ってきます。それこそ、掛け替えのない経験になるはずですよ。

同時に、私にとってもゼミは大切な勉強の場です。学生の調査報告が様々な刺激を与えてくれます。修行形態の変化、売れ筋の変化や商いに対する意識の変化、その道のプロでなければこたわれない問題、苦勞話。学生の報告を聞きながら時代の変化、文化や生活を支えてくれるものづくりの奥深さを学び、気持ちを引き締めています。

ところで、学生には常々五感を全て使って街で何かをキャッチしてきなさいと指導しています。これには自戒の念も込めていますが、近年のポータブル機器の目覚ましい発展は、いつでもどこでも自分を「楽しい」世界に導いてくれる一方で、眼前の物事からは感覚を遠ざけているような気がしています。つまり、目はスマートフォンばかりに向いて興味のある情報だけを仕入れ、耳では好きな音楽

を聴き、口には好みの味と香りの飴やガムを放り込むといった具合に、自分の身体に関わる事柄の多くが自分好みに調整できるため、自分のすぐ外側に対して気を向ける機会が大幅に減少しているように感じられるのです。そのような危機感から、ゼミ生には五感を鋭敏に、感性を豊かにしてもらいたいと思っております。自分の外側を意識して初めて社会人としての基礎ができるのではないかと思います。

私も学生と一緒に街に出ますが、何気なく、当て所なくぶらぶらしている様子に気付かされます。「この道



京都市東山区の道端に植えられた大量のアロエ。私は相当ビックリしたのですが、学生は平然としていました。普段歩かない道を学生と歩いてこそその発見でした。植えてある理由はわかりません。

にはなぜアロエが植えてあるのだろうか?」「この町には新しい若手の職人さんが集まってきているなあ」といった街の不思議なことや変化に気付くことができ楽しい時間を過ごせます。また、学生と私の感覚のギャップなどに気付けることも実に有意義です。例えば、休憩するカフェひとつ取り上げてみても、今の学生がオシャレというカフェと、私が学生の頃によく通ったオシャレなカフェは雰囲気が違います。この違いを楽しむことがとても大切だと思っています。

大半の学生は大学を卒業すると社会に出るので、ゼミ生には学生時代にできるだけ多くの世代、多くの価値観に触れつつ、その出会いを楽しめるようになってもらいたいと思っています。違いを楽しめる力は様々な場面で彼らを助けてくれるに違いありません。さらに言えば、それが社会にとってもつながりを育む大切なきっかけのひとつになるような気が致します。そうは言っても、自分が足繁く通ったお店にゼミ生を連れて行くとき、どう思われるか心配になることもあります。しかし、思いの外楽しんでくれるも

ので、先日、私が学生時代からお世話になっていたお店でゼミの宴会を催しましたが、大変に盛り上がり楽しい会になりました。学生の気遣いもあると思います。が、いいお店やいいものというのは世代を超えて伝わるのではないのでしょうか。私自身の学生時代を振り返っても、諸先輩に連れて行って頂いたときのワクワク感や緊張感は今も鮮やかな記憶として残っております。それは現在の学生も同じなのだろうと思います。

ゼミは、知識を伝えるだけでなく、様々な物事に向き合う態度を伝えられる場でもあり、学生も教員も学問を通じて切磋琢磨できる場です。また、2年半も膝を突き合わせて議論し、一緒にご飯を食べ、喜怒哀楽をともにするゼミは、大学教育の中でも特に重要な意味を持つと考えています。これからも時に厳しく、時に和気藹々と学生ともども研鑽を積んで参りたいと思います。もし、奥田ゼミの学生がお邪魔することがあれば、厳しく、またあたたかい目でお付き合い頂ければありがたく存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。



井口 貢

(大学政策学部博士後期課程教授)

まちつむぎと人文知 ～文化政策の教育と実践から～

はじめに

文化政策とそれを抛りどころとする観光やまちづくりに関わる研究と教育に努めるようになって四半世紀以上が過ぎました。

「研究と教育は表裏一体である」とは、若い頃からよく聞かされてきた謂いですが、専門分野の特殊性の故か、学生たちの若い感性から啓発を受けた部分も少なくはありません。もちろんそれを踏まえつつ、彼ら彼女らの求めるところに対応しながら講義内容や演習の展開を改良してきたところもあります。一方で、一貫して若い人たちに伝えようとしてきたことは、文化政策において私なりの一定の定義として「常在の文化資源を活かして地域の福祉水準を向上させるための公共政策」を前提に、「地域社会のなかで普通に働き、普通に暮らし普通に生きていく人々（いわば「柳田的常民」）の日常の時間と空間の中において、文化的・創造的環境を整えることでこころ豊かな暮らしを実現し、持続可能な地域社会の在り方を考察する」ということです。ちなみに学生たちには、地域の文化を大切にすることを通して、普通に生きる人々の日々のささやかな幸福の実現を求めた（文化政策も観光政策も共に究極の目的はそこにあると思います）柳田國男と宮

本常一の著作は、何からでも良いので読むことを演習受講生には半ば義務と化して、輪読や自由課題のテキストにしています。

書を携えてまちに出よう

文化と観光が研究と教育の対象となる以上、当然フィールドワークは不可欠であり、いわゆるPBLは重要な教育実践のひとつとなります。私の演習では、京都はもちろんですが、過去から今に至るまで、近江八幡や金沢、飯田、常滑、氷見など特色ある多様な地方都市でフィールドワークを展開してきました。そしてその際に合言葉のごとく唱えてきたのが、少し戯画的表現となるでしょうが、「書を携えてまちに出よう」という文言です。当たり前のことですが、対象とするまちの歴史や文化に関わる著作等はもちろんのこと、まちづくりや観光の現状に関する文書や資料を可能な限り収集し読解したうえで、フィールドに赴こうということです。そしてフィールドでは、これも当然のことですが、まちで人と出合い対話することを心がけます。出会う人たちは、行政や文化施設・観光施設等の担当者や関係者、研究者はもちろんですが、それ以上に普通に暮らし普通に生きていく人々との対話を大切にすることを強調します。昨年度にあたる2014年（平

成26）には、9月よりおよそ4ヶ月に渡る長期間、近江八幡市立八幡小学校の第4学年の児童たち（まさに普通に暮らし普通に生きていく人々といつて良いでしょう）と共に学ぶ機会を得ることもできました。この試みは、児童たちはもちろんのこと学生たち、そして当該小学校の担任団の先生方、そして私にとっても共に大きな糧となる「協育」（井口造語）の成果でした。学生たちにとつてこうした学びは、「書」だけでは決して得ることのできない経験でしょうが、それを通して自己の中で、他者の手による「書」を自ら補うことのできる貴重な成果にもつながるに違いないと確信しています（この取り組みについては、数度に渡り京都新聞に採り上げていただきました。同年10月24日付、12月22日付など）。

「まちつむぎ」から「まちつむぎ」へ

少し時を遡ってみたいと思います。今から6年前、2009年（平成21）の5月に、私たちの演習では3・4回生合同で飯田市（長野県）にて合宿を行い、数日間を渡って市民・企業・行政の方々と協働で、ワークショップとフィールドワークを展開しました（余談ですが、飯田市は松岡國男が柳田國男となった柳田家父祖の地であり、我が演習にとつてはひとつのトピクスです）。

そのときに、何人かの学生が「まちづくり」という言葉が抵抗なく使われている現状に、違和感を覚えました。もちろん、この言葉自身は全く悪いものではないと思います。例えば、「防災に強いまちづくりを目指して……」といった文脈では、まさにフィットした言葉かもしれません。飯田市でも路地の風情を醸し出す「裏界線」のまち割りの形成は、1947年（昭和22）の飯田大火で旧市街地の大半が焼き尽くされ、その反省から防火用道路として造られた新たな「まちづくり」の成果です。また、このまちの中心市街地のランドマークとなった「りんご並木」も同様です。しかしそれでもなお学生たちが飯田のまちをみつめながら痛切に共感を覚えたことは、このまちがコサルタントやイベント企画会社の知識でまちづくりを推進してきたのではなく、生活文化とその長い歴史のなかで、常民の知恵と思想が縦糸と横糸のごとく重層的に、あたかも一枚のタペストリーのように、人々が日々のくらしのなかで「つむいで」きた結果なのではないかというのでした。そこで、私たちはこのワークショップを通し「まちづくりよりまちつむぎ」を提案しました。そしてこのことがきっかけとなり、この年の7月よりまちの人たちが中心となって、定例トークサロン「まちつむぎの夕べ」が月

一回のペースで始まることになったのです。7月24日付の地元紙「南信州新聞」では、同志社大学井口演習生と市民とのコラボの成果として、大きく採り上げていただいたことも、学生たちにとっては大きな自信となったようです。

人文知の大切さ：詩心、史心、誌心を大切に

紙幅が尽きそうになってきました。上述のように私自身、25年以上にも渡ってわが国の「文化」や「観光」、「まちつむぎ（まちづくり）」について学び、その教育に携わってきても強く感じることは（とりわけこの分野においては）ということになるでしょうが、日本語という言葉や詩心、史心、史心、誌心を忘れないこと、すなわち人文知を大切にしなければならぬという事です。諭えていかなければ、「いかにして来訪者に、あるいは外国人観光客にお金を落とさせるか」といった思いやりや品格に欠けるような文言や政策の主旨を、間違っても学生たちが発想の基底に据えないために



2014年10月24日（金）
京都新聞掲載

ラテンアメリカ地域研究と社会政策研究



う さ み こういち
宇佐見 耕一

(大学グローバル地域文化学部教授)

ラテンアメリカ地域研究

私の研究分野は、ラテンアメリカ地域研究という領域が一番適切だと自認しています。ラテンアメリカ地域研究には、ラテンアメリカに関する文化、社会、経済、政治や歴史等多様な分野が含まれます。また、そもそも私は地域研究という研究の方法論はないと思っています。実際、日本ラテンアメリカ学会に所属し、ラテンアメリカ地域研究をしているという研究者の研究をみてみると、ラテンアメリカの歴史の特定の分野、政治の特定の課題、経済に関する特定の課題等々を研究しており、研究の方法論も歴史学、政治学、社会学、経済学や人類学等々ということになります。ラテンアメリカという地域性を意識しつつ、個別の課題をもち、各自の方法論を持った研究者が行う研究の総称ではないかと理解しております。

ラテンアメリカの

社会政策・福祉国家研究

そこで私の研究ですが、具体的にはラテンアメリカ、特にアルゼンチンの社会政策を中心に研究してきました。社会政

策というと、これも地域研究と同様にとのよう分析的方法論を用いるのが問われる領域です。私の研究はアルゼンチンにおける社会政策を政治学的視点から分析するということになりました。私が取り組んできた問題は、福祉国家、雇用、高齢者政策、子ども政策、対貧困政策等の社会政策上の多くの問題でした。ここではラテンアメリカにおける福祉国家を事例として私の研究を紹介したいと思います。

ラテンアメリカでは、第二次世界大戦後多くのポピュリスト政権が成立し、組織労働者を主な対象とした労働法や社会保障制度の整備が進みました。また、社会保障制度の整備は、一部の軍事政権下でも進行了しました。こうしたラテンアメリカにおける社会保障制度の発展は、東アジアの新興諸国と比べて早期に開始され、適用範囲も広範でした。他方、学問的には第二次世界大戦後ヨーロッパを中心に多様な福祉国家論に関する議論がなされてきました。福祉国家論の議論課題は大きく分けて二つあり、それぞれの福祉国家がどのような性格を持っているのかという福祉レジーム論に集約される議論と、そうした多様な性格を持つ福祉国

家がどのような要因で成立したのかを問う課題です。

欧米先進国における福祉国家論のひとつの到達点がエスピン・アンデルセンの『福祉資本主義の三つの世界』（ミネルヴァ書房2001年）でしょう。そこで福祉国家は、北欧諸国を中心とした普遍的な社会民主主義レジーム、大陸ヨーロッパ諸国を中心とした社会保障が職域と連動した保守主義レジーム、および米国等の公的保障は少なく保障は市場から調達する自由主義レジームに分類されています。またそうした各種レジームが成立した要因として、階級連合が重視されています。

アルゼンチンにおける福祉国家の形成

前述したように、ラテンアメリカにおいても第二次世界大戦後の欧米諸国における各種福祉国家の形成と平行して、労働法や社会保障制度が整備されてきました。そこで、欧米における福祉国家の議論をラテンアメリカの社会政策論のなかにも何とか取り込もうと考えるようになりました。その際エスピン・アンデルセンの議論は、社会保障制度におけるさまざまな否定的側面をもその特色としてひと

つの福祉レジームとした点で大いに参考になりました。私がこの議論を始めた時には、普遍的な福祉国家を理想とし、それを基準に福祉国家の定義を行う議論もありました。とはいえ、ラテンアメリカ内部も多様であり、福祉国家研究の対象は、先進国と類似した社会保険制度や社会扶助制度が整備され、それが一定の人口をカバーしている域内の社会保障先行国が分析の対象となります。

アルゼンチンでは第二次世界大戦後において成立したポピュリスト政権のペロン政権下で、労働法と社会保障制度の整備が進み、経済政策としては輸入代替工業化政策が採られました。輸入代替工業化政策の下で組織労働者は拡大し、彼らは輸入代替工業化という経済政策により雇用と賃金が保障され、さらに労働法・社会保障制度によっても保護されています。しかし、貧困層への保護は大統領夫人が総裁を勤めるエヴァ・ペロン財団によりなされ、制度化が進まず、クライアティリズム的傾向を強く持つものでした。こうしたペロン政権下の福祉レジームは、大陸ヨーロッパ諸国の保守主義レジームとの類似点が多く見られます。また、アルゼンチンの保守主義的福祉レジ

地域研究のあり方…共同研究の有効性

はじめに私の研究は、自分の研究分野をラテンアメリカ地域研究が最も適当であると述べましたが、それは私が長年ラテンアメリカ地域に関する共同研究を実施してきたからです。これまで行ってきた共同研究のタイプには二種類あり、「ラテンアメリカの福祉国家」であるとか「21世紀ラテンアメリカの左派政権」であるとかというように、方法論を共にする域内の異なる国をフィールドとする研究者と行う研究があります。この手法はそのテーマに関するラテンアメリカの特性と域内の多様性を描き出すのに有益です。もうひとつは「キューバ総合研究」であるとか「コスタリカ総合研究」であるとかというようにラテンアメリカの一国を異なる方法論を持つ研究者が参加し、それぞれの分析ツールから分析する手法です。この種の共同研究は、ラテンアメリカの特定の国の総合的理解に寄与しています。



習します。例えば、給与栄養目標量はどうのように設定するのか、献立はどのように計画するのか、原価や栄養価はどのように計算するのか、食材の発注量はどのように算出するのか、食材は何℃で保管するのか、調理中の衛生管理はどのように行うのか、作業分担はどのように計画するのか、というように、管理する項目



が多岐にわたります。それらを学習した上で、実習では計画と試作を繰り返し、3年次に実際に100人分の献立作成・調理を行い、提供します。管理栄養士専攻の学生といえども、入学時は調理経験が少なく、包丁や調理の技術が未熟な学生が多いです。グループ間のコミュニケーションもとれておらず、

卒業後にも役立つ知識と技術と感性を
給食を提供する現場では、栄養計画に基づく給食が対象者の目的に応じたものであるかを評価することが求められます。学校給食では児童の成長のため、事業所給食では従業員の健康の保持・増進のため、病院では患者の治療のため、高齢者施設では高齢者のQOL向上のためと、様々な目的があります。対象者の身体状況や喫食状況、嗜好等を把握し、対象者に応じた給食の提供を行うためには、調理力・献立力、他職種とのコミュニケーション力が不可欠です。学生自身の学びや気づきを学生たちの将来に活かすことができるように、思いを伝えながら指導していきたいと思っています。

うま味感受性を高める 味覚教育・研究と 給食実習の取り組み



こうだともこ
神田 知子
(女子大学生生活科学部教授)

だしに対する味覚感受性に関する研究
大学院生の頃から、食べ物を美味しく感じる基準が人によって異なることを不思議に思っており、いつか味覚に関する研究を実施したいと考えていました。山梨県の大学に勤務していた頃、魚介類の利用状況調査を行ったことがきっかけで、煮干しだしの美味しさに気づき、2005年から和風だしと味覚に関する研究を始めました。2008年に女子大学に赴任してからは、かつおと昆布のだしを用いて研究を行っています。対象は、小学生から大学生と幅広く、だしを飲んだ後の香り、生臭み、うま味の感じ方などについて、自分の感覚で評価してもらいます。これまでの研究から、天然だしを子ども頃から経験している人は、顆粒だしを経験している人に比べて天然だしの香りを良く評価していることがわかってきました。また、基本味のうま味の味覚感受性が高い人は、だしのうま味を認識でき、生臭みを弱めて感受できることもわかってきました。

子どもの頃から、うま味の味覚感受性

を高める味覚教育を行うことにより、調味料を多用しなくても、素材の味を生かすことができるのではないかと考えています。素材の味を美味しいと感じることができると、食塩や油脂の過剰摂取を防ぐことができ、食事のコントロールが良好に行えるのではないのでしょうか。また、天然だしのうま味を感じ、生臭みも含めた風味を受け入れられるようになることは、日本の伝統的な食生活を受け継ぐこと、地域の産業を守ることもつながると考えています。

給食の大切さ・給食経営管理の 面白さを伝えたい

女子大学生生活科学部の食物栄養科学科管理栄養士専攻の学生を対象とした、給食経営管理に関する講義と実習を担当しています。日本の病院や高齢者施設、学校給食などで提供される給食は、高度なシステムによって運営されています。講義では、給食が対象者に提供されるまでに、どのようなプロセスを経るのかを学

「本場に100人分の給食が提供できるのか」と不安を覚えることもあります。何度も集まって試作や検討を繰り返し、最終的にグループで計画した献立が料理として出来上がり、喫食者から高評価を得られた時の達成感と充実感は、学生たちの大きな自信につながるようです。

現代社会演習での取り組み —複雑な現代社会を生き抜くために—



やまもと けいた
山本 啓太

(女子中学校・高等学校教諭)

はじめに

本校の現代社会演習という授業は、高校3年生を対象とした公民系の選択科目です。2014年度は、26名の受講者があり、2クラスに分かれて週1回2時間の授業が実施されました。その名の通り演習なので生徒それぞれが主体的に学べるよう、発表やディスカッション、施設訪問といった授業計画を用意しました。ここでは、授業のメインである発表に焦点を当て、その効果や問題点などを紹介したいと思います。

一回の授業が発表者個人の責任になる

発表は、生徒それぞれが関心をもつ社会問題について行い(30分)、その後、質疑応答を行うという一般的なものです。少人数の授業なので、1日2名、各学期にそれぞれ最低1回の発表ができました。また、1学期はわたしが司会をしましたが、2学期からは生徒が司会を担当し、休み時間に内容を確認



授業の様子

し、「発表者の紹介↓内容についての簡単な説明↓発表終了後のまとめ↓質疑応答のリード」を行いました。

生徒一人ひとりに対して授業1時間が与えられているということは、生徒にとって大きなプレッシャーになります。発表が早く終われば、それだけ自分の責任を果たせなかったことになり、時間をオーバーすれば、休み時間にもかかわらず他の生徒を拘束することになり、迷惑をかけます。また、退屈な発表をすれば、聞き手は正直な態度で表れます。発表毎に発表者だけでなく、聞き手にも課している報告用紙に面白いものがありました。「寝ている子がいた。とても悔しかった。2学期は寝かせない」。

反対に、面白い発表をすれば、質疑応答がいつも以上に盛り上がり、終了後、聞き手から「わかりやすかった」「勉強になった」といった反応を得ます。1学期を通して、発表者は気づきます。聞き手を意識せざるを得ないということ。

同時に生徒には、質疑応答が盛り上がりなければ発表者の責任はもろんこと、司会者の責任でもあるということを伝えていきます。質問が出なければ、司会者は自ら論点を絞り、議論を展開せざる

を得ません。発表者、司会者、聞き手がそれぞれ自分の与えられた責任を全うすること、いやむしろ、全うせざるを得ない「場」を作り出すことが教員の役割になります。

報告用紙で身に付ける力

そのような「場」を作るため、本授業では発表と共に「報告用紙」を重要視しています。先にも述べましたが、1回の発表に対して全員に課している報告用紙は、A4プリント1枚、その日に行われた2名の発表について評価をし、翌朝までに提出されます。報告用紙の内容も重要なことですが、その体裁も看過できません。体裁とは、参考文献の書き方、レジュメや報告用紙の提出期限、誤字・脱字の有無、漢字の間違え、表現方法、字の丁寧さなど、発表を行う上、あるいは報告用紙を提出する上で必要な最低限のルールのことです。4月当初、多くの生徒はそのルールを軽視していました。知らず知らずのうちに楽をしたと思うのは当然のことです。しかし、それは報告用紙に如実に表れます。それをその都度、細かく指摘することで、楽のできない「場」を作り出すことにしました。



発表に対するフィードバック

また、報告用紙から他にも問題があることがわかりました。それは、発表がその場限りで完結してしまうということです。というのも、生徒たちは発表者の主張を自分の問題意識に引き付けて考え、議論を展開させる報告用紙がなかなか書けませんでしたが、ただ報告用紙の提出を課すだけでは、感想文の域を脱することができないということでした。そのため、報告用紙の書き方として、「発表に対する評価(語り口、テーマ、振る舞いなど)↓発表内容を自分なりの問題意識とつなげて考える」という流れを意識して書くことを要求しました。その結果、2学期の終わりごろには、多くの生徒が発表内容だけでなく、関心をもったことに対して自ら調べて報告用紙を書くようになりま

した。発表を聞いて、この点を疑問に思ったので自分なりに調べてみると、このようなことがわかりました。：というように、更なる展開を視野に入れた未来志向型の報告用紙が少しずつ増えてきました。

おわりに

本授業では、発表者となる生徒一人ひとりが教員となり、それぞれの知識・視点を提示します。これに対して、聞き手である生徒は、それらの知識・視点を共有し、また別の創造的な何かにつながられるように努力します。その際、彼女たちに補助線を引いてやるのが教員の役割となります。

本授業の最終的な目標は、現代社会演習という生徒・教員でつくる授業の「場」を通して、多様化する現代社会の複雑性を知りその問題を共有し、複雑な社会を生き抜く力を養うことです。本授業を通して、改善すべき点は多々ありますが、生徒と共に一つ一つその問題をクリアしていきたいと思っています。その中で、生徒一人ひとりが様々な力を身に付けることのできる「場」を用意できるように、わたし自身も未来を見据えて授業準備をしていきたいと思っています。